

## IAUD Newsletter vol.11 第8号(2018年11月号)

1. 「第13回48時間デザインマラソン in 東京」開催報告 ..... 1
2. 研究部会「コトのUD」検討 ..... 5
3. 「第7回国際UD会議2019 in バンコク」開催のご案内 ..... 9
4. IAUD 11月の予定 ..... 10

第13回

48時間  
デザイン  
マラソン

## 誰もが楽しめるオリンピック・パラリンピックに向けて 「第13回48時間デザインマラソン in 東京」開催報告



満員となった最終日の公開プレゼンテーション(東京・芝浦)

ユーザー参加型デザインワークショップ「第13回48時間デザインマラソン in 東京」が、9月6日(木)から9月8日(土)の3日間、芝浦工業大学芝浦キャンパス(東京・芝浦)で開催され、今回も実現性が高く斬新なデザインが多く提案されました。

最終日に行われた公開プレゼンテーションには、IAUD 総裁の瑠子女王殿下にもご臨席賜り、48時間デザインマラソンへの期待と、若手デザイナーが障害者との積極的なデザイン活動に対する姿勢へ、温かいご支援のお言葉を頂戴しました。

今号の Newsletter では、3日間の様子を主催したワークショップ委員会の藤木武史委員長が報告します。



会場の芝浦工業大学  
芝浦キャンパス

## デザイン思考をユーザーと実践

48 時間デザインマラソンは、企業のデザイナーが障害のあるユーザーと一緒に街に出かけ、観察や体験を重ねながら気づきを発見しデザインに繋げる、デザイン思考をユーザーと実践できるワークショップです。

48 時間という限られた時間で体験、発見、デザイン、検証を行い、生み出された新たな提案は最終日の公開プレゼンテーションで発表します。

2014 年からは墨田区の製造系中小企業にも参画頂き、ワークショップで出たデザイン提案を実際に制作し、実用まで繋げられる目標を新たに付加しました。

今回は、芝浦工業大学と東京東信用金庫のご後援、神戸芸術工科大学 相良二郎教授の監修のもと、コクヨ(株)、トヨタ自動車(株)、富士ゼロックス(株)など企業 14 社、1 法人から 32 名のデザイナーが参加しました。ユーザー 1 名とデザイナー 5、6 名、学生(芝浦工業大学、神戸芸術工科大学)2 名で 1 チームを構成し、A から E の 5 チームに分かれて実施しました。

ユーザーの抱える障害も、聴覚障害や視覚障害、下肢障害など様々で、各チームがいかにユーザー視点で考え抜いていくかが問われます。今回参加したユーザーには「東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会」出場を目指している人をはじめ、積極的に多様な活動をしている人が多くいました。



監修の相良教授

## 「東京 2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会」を見据えたデザイン

今回のテーマは「応援—Cheer for everyone—」。2 年後に開催される「東京 2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会」を見据え、選手だけでなく、また障害者だけでなく、すべての人を楽しく元気にさせようという、UD の考えにつながるテーマとなっています。

初日のフィールドリサーチには 5 チームが東京の街へと繰り出し、移動やショッピングなど日常においてユーザーがどのような問題を抱えているかを観察しました。

行き先は新国立競技場から表参道、東京駅周辺、浅草など様々です。障害者にとって東京という街がいかに優しくないかは、これまでも常に議論されてきたことです。48 時間デザインマラソンでは、そうした問題を直線的に取り上げるのではなく、課題の認識からいかに思考をジャンプさせるかが問われています。

フィールドリサーチ終了後には全体の振り返りの会を実施し、各チームがそれぞれの「気づき」について報告しました。



東京の街中で行われたユーザーとのフィールドリサーチ(左:D チーム、右:E チーム)

## ユーザー視点でデザイン検証

48時間デザインマラソンの醍醐味とも言えるのが二日目です。各チームが課題の抽出とそれに対するアイデア出し、そしてデザイン提案の作成をします。

喧々諤々、意見の衝突は当たり前で、デザイナーだけで盛り上がりすぎてしまい、ユーザーが置いてきぼりになるケースなどもありました。各チームは常に軌道修正を行いながら、多様な問題をくぐり抜けて最終提案へとつなげていきました。

48時間デザインマラソンの良い点は、ユーザー視点でデザインを考え抜くプロセスを学ぶことです。自分の考えたアイデアやデザインを率直にユーザーにぶつけ、時には方針を変える勇氣も必要になります。ユーザーが答えを持っているわけではありません。

メンバーは全員が初対面です。アイデアを飛躍するためには、他のメンバーの意見を聞き、同調と議論を繰り返す対話力が重要となります。それを制限時間内に行わなければいけない、心身ともにハードなワークショップです。



多くのアイデアが議論されたチーム作業(左:Aチーム、右:Cチーム)

## 実現性のある斬新なデザインを提案

最終日には芝浦工業大学芝浦キャンパス8階メインホールで公開プレゼンテーションが行われました。

今回も瑤子女王殿下ご臨席のもと、参加企業やIAUD会員、今後プロトタイプと一緒に製作していく墨田区の製造業系中小企業、メディア関係者など186名が参加しました。

各チームからは非常に魅力的で、実現性のある斬新なUDの提案がされました。各チームの提案タイトルと内容は以下のとおりです。

### ・Aチーム「おしゃべりベンチ」

言葉をシンプルに影で可視化して、どんな人でも垣根のない会話をする事ができるベンチ。より親しみやすく面白く感じてもらうため、ベンチではなくベンチというネーミングにしました。

### ・Bチーム「ちょい+」(+はtasuと読む)

2020年のオリンピック・パラリンピック会場や街で、助けてほしい人や助けたい人が自分の気持ちを発信する次世代コミュニティアイテム



公開プレゼンテーションの様子(Bチーム)

#### ・Cチーム「ぼんぼん」

遠慮やためらいを取り払い、継続した応援と遠慮のない関係を築くブレスレット。

#### ・Dチーム「U-cheer」

2020年のオリンピック・パラリンピックで、猛暑の炎天下で競技や応援する人々に向けたミスト噴出機能を持った団扇。

#### ・Eチーム「E-PET」

目の不自由な人が、スムーズで楽しく移動でき、コミュニケーションのきっかけを与えてくれるふわふわ飛ぶペット。



これらの提案から「ベストデザイン賞」に選出されたのはDチームの「U-cheer」(上図)です。フィールドワーク時、自律神経障害のため汗がかけない手動車いすのユーザーが霧吹きで水を身体に吹きかけ体温調整を行っていました。そのユーザーに向けて、そして2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて提案されたもので、ユーザーの切実な課題をカッコよく、誰でも使えるものへとつなげた点が高い評価を得ました。

各チームには48時間デザインマラソンに参加し魅力的な提案を成し遂げた証として、ワークショップ委員会より「修了バッジ」が授与されました。

### 瑠子女王殿下からのお言葉

プレゼンテーション終了後、瑠子女王殿下にご挨拶いただきました。

瑠子女王殿下からは、「今年は全チームの参加者と全工程一緒できた。モノを作り上げる為にはユーザーは勿論のこと、参加メンバーとの十分な話し合いもとても重要である。参加メンバーの方々は企業に戻っても、今回の経験を生かして頂きたい。そして、今後も実際の製品化に向け、様々な方のアドバイスを頂きながら活動が続くことを願っています」と、大変励みとなるお言葉を頂戴しました。



ご挨拶なさる瑠子女王殿下

### 2020年までに商品化の実現へ

このワークショップを通して語られていたのは、行動観察の難しさです。

課題を見つけようと血眼になるのではなく、ユーザーがなんとなくした行為の流れやその要因を観察したり、ユーザーが普段使用している道具についての傷や汚れを観察することで課題が見えることもあります。「困ったことはなんですか」と直接訪ねても、ありふれたニーズにしかたどり着きません。

商品やサービスを機能や性能で語る時代は終わりました。48時間デザインマラソンの真のミッションは、ユーザーに経験的価値をいかに提供するかにあります。

健常者も、見方を変えればメガネを必要とする時点で障害があるとも言えますし、身体のどこかに常に痛みを抱えている人もいます。今回のワークショップで参加者たちが痛感したのは、何が障害なのか、画一的な考え方にとらわれては良いデザインはできない、ということでしょう。

運営サポートとして参加している企業デザイナーにとっても、このワークショップはファシリテートしながらモノを積み上げる力をつける重要な時間になりました。

今回提案されたデザインについて、今後は墨田区の下町企業と共にプロトタイプを製作します。

また、起業塾のような形態で、製品化だけでなくデザインの考え方や事業としての発展などについてワークショップも行っていきます。

そして、「東京 2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会」までに商品化の実現を目指す予定です。

※この記事は AXIS web magazine で掲載いただいた内容を一部転載しております。

<https://www.axismag.jp>

※これまでの「48 時間デザインマラソン」開催報告はこちらをご覧ください。

<https://www.iaud.net/48hdm/>



参加者全員で記念撮影

## 新たな UD の検討テーマを求めて 活動報告: 研究部会「コトの UD」検討

研究部会では、できる限り多くの人々が快適に暮らしやすい社会の実現をめざし、様々な生活シーンにおいて魅力ある製品やサービスを創出するため、業種・業態を越え幅広い視点で 8 種※の研究プロジェクト活動を行っています。

※住空間 PJ、移動空間 PJ(2018 年 8 月末解散)、ワークスタイル PJ、余暇 UDPJ、衣 UDPJ、メディア UDPJ、標準化研究 WG、手話用語 SWG (PJ: プロジェクト、WG: ワーキンググループ、SWG: サブワーキンググループの略称)

一方、ICT の進展やグローバル化など様々な面で社会は常に変化し、人々の価値観も「モノ」から「コト」へその興味の対象が変化しています。

そのような中、「東京 2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会」以降の新たな時代に向けて UD はどのように対応していくべきか。また、これまでの各 PJ、WG、SWG による点の活動から、つながりを意識した活動も重要ではないか、と考えています。

そこで、研究部会自らの変革を求め、これまで 2 回の合同ワークショップを開催して横断的に活動を進めています。

今号の Newsletter では、その途中経過を研究部会の木暮毅夫部会長が報告します。



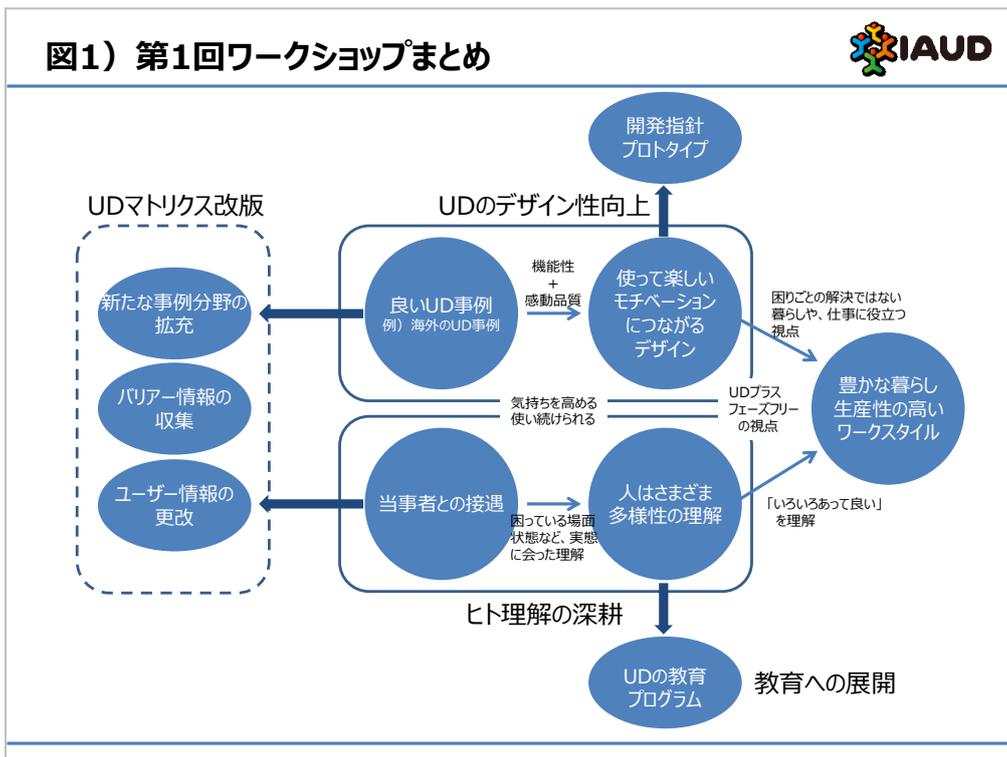
研究部会合同ワークショップの様子

## 今後取り組むべき UD テーマ「人の理解の深耕」「良いデザインの実現」

社会や価値観の変化に対し、現在の UD の課題や今後取り組むべきテーマを明らかにするために、3月15日(木)にIAUD サロン(東京・八丁堀)で第1回ワークショップを開催し、各PJ、WG、SWG 主査ら12名が参加しました。

集中的に意見を出し合った結果、共通認識としてUDの大きな目標の一つに「豊かな暮らし、生産性の高いワークスタイルの実現」があると確認しました。

そして、そのためには私たち自身が「人はそれぞれ多様である」ことを理解し、その「当事者との接遇」の機会の拡大を通じた「人の理解の深耕」、さらに、UDの「良い事例」の学習を通じて「使って楽しい、モチベーション向上」につながる「良いデザインの実現」、これら2つが必要であるとの共通の見解を得ました。



### 「コトのUD」先端事例を学ぶ

第2回ワークショップは、8月21日(火)に富士ゼロックス(株)みなとみらい事業所お客様共創ラボラトリー(横浜・みなとみらい)で開催され、研究部会メンバー約30名が参加しました。

第1回ワークショップの結果を受け、今回は外部で認められた良い事例を通じた新たな視点の獲得と、これからのUDのあるべき姿に関して議論を重ねました。

前半では事例紹介として、「IAUD アワード2017」金賞受賞の「ともに学ぶプロジェクト 障害の有無によらず共に学ぶためのICT利活用」※について、富士通デザイン(株)の杉妻讓氏からプレゼンテーションが行われました。



杉妻氏のプレゼンテーション

この取り組みは、香川県教育委員会と香川大学、富士通(株)の産官学体制で行われたもので、特別支援教育でのICT利活用やインクルーシブ教育システム構築に向けてお話しがありました。

実験を繰り返して現場の児童や先生の意見をくみ上げ進めたプロセスや、肢体不自由、発達障害、自閉症、学習障害など多様な児童への対応が具体的に紹介されました。

また、適切な合理的配慮を含め、子どもたち一人ひとりの特性に応じたサポートによって不可能であったことを可能とすることで、学習意欲や生きるチカラの向上が実現したとのお話しがありました。

さらに、ICT 機器を導入するだけでなく、その具体的な活用方法を合わせて提供することの重要性が説明されました。

※「IAUD アワード 2017」金賞を受賞した「ともに学ぶプロジェクト 障害の有無によらず共に学ぶための ICT 利活用」の詳細は、IAUD Newsletter vol.11 第 9 号(2018 年 12 月号)に掲載予定です。

### UD の新たな課題「多様化への対応」「標準化推進」

後半では、プレゼンテーションで得られた視点も含め、第 1 回ワークショップに引き続き、「これからの UD の方向性」について参加者全員でワークショップを行いました。

関根千佳副理事長にも参加いただき、コトの UD 検討 WG の岩崎昭浩リーダーをファシリテーターに意見交換が行われました。

ここでは、UD をさらに拡大していくには対象となる多様な人々への理解を進め、現場で発生している様々な人々の困りごとの理解の機会や、大人を含めた UD 教育が必要であることが明らかになりました。



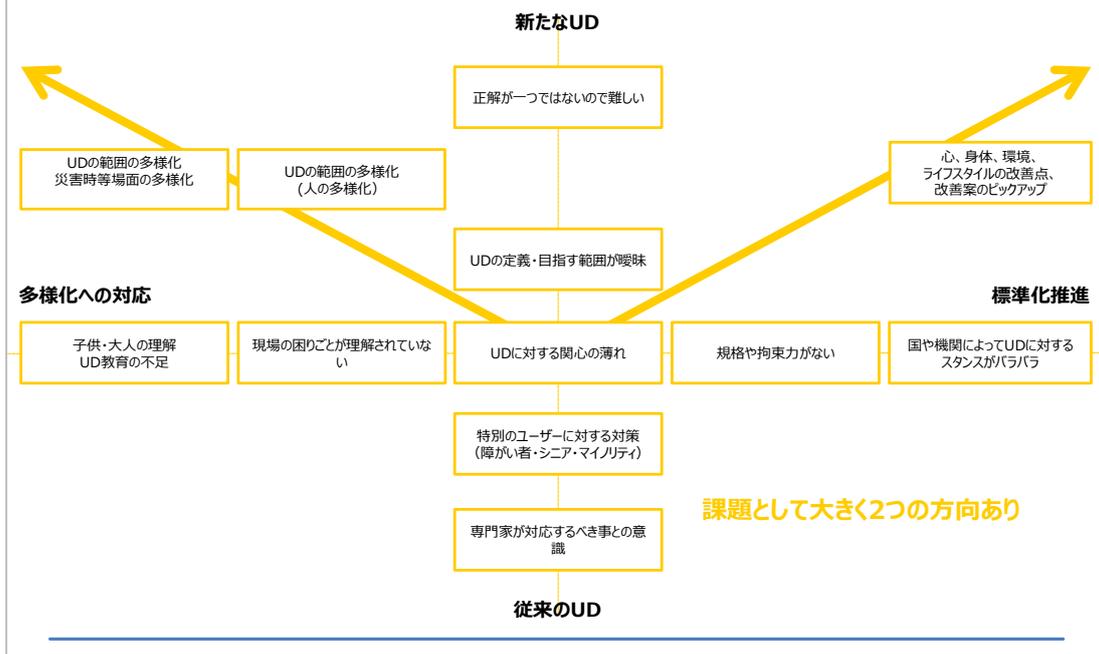
活発な意見交換が行われたワークショップ

多様性に関しては、対象者としてより広く検討を進めること、平常時だけでなく災害時でもより広い考察を行う必要性がある、などの意見が多く出ました。

一方で、UD を進める上で様々な機関間でのスタンスの相違点の問題になることから、こころ、身体、環境、ライフスタイルなど、横断的に改善点や改善案を抽出し、標準化を押し進める必要があるとの指摘がありました。

また、新たに UD に取り組む人たちにとっては、正解が一つに絞れないテーマだけに、取り組みが難しいのでは、という意見も得られました。

図2) 第2回ワークショップまとめ「現在のUDの問題点・課題」 



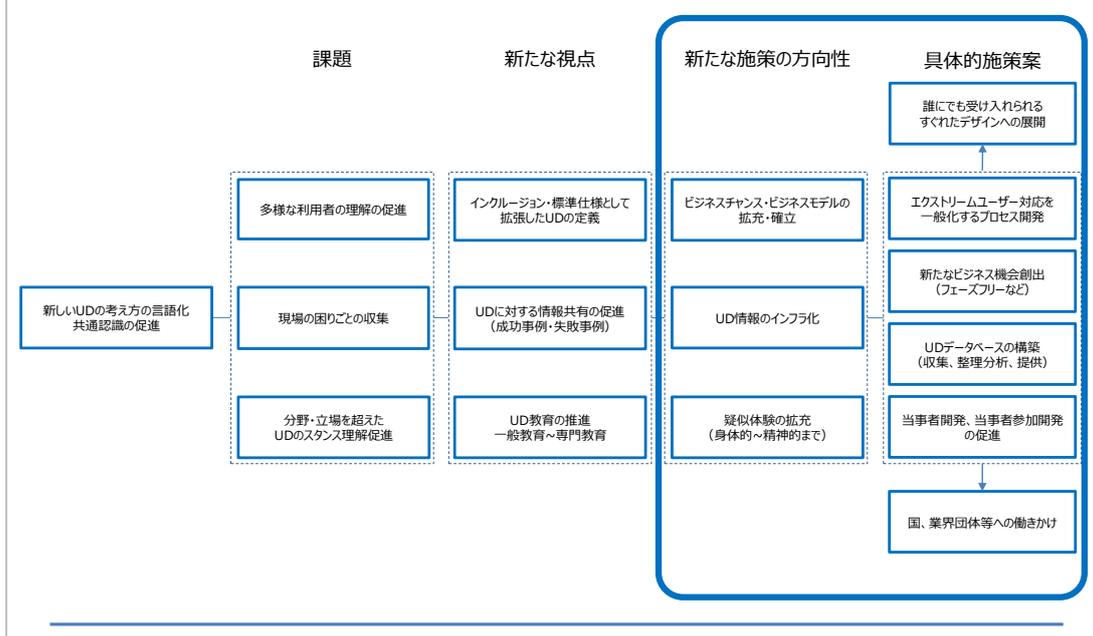
### これからの UD 3 つの新たな施策

今後の進めるべき方向性に関しては、UD 対応の裾野を広げていくために、UD の方向性に関し共通認識を確立していくことが重要であるとわかりました。

そのための新たな施策として、当事者の困りごとの理解のための「疑似体験の拡充」、多方面からの参加を可能にする「UD 情報のインフラ化」、UD を持続可能にするための「ビジネスチャンス、ビジネスモデルの拡充や確立」が挙げられました。

最後に関根副理事長から、「UD を志す人々が一同に集い、各方面から UD を取り巻く環境、これからの UD が目指すところを議論していることは、非常に重要であり IAUD が行うべきこと。今後も継続して進めて欲しい」との意見がありました。

図3) 第2回ワークショップまとめ「これからのUDの方向性」 



## 更なる「コトの UD」研究へ

第 2 回ワークショップ終了後のアンケートでは、参加者の 95%がこのような横断的な議論の継続を望んでいることが分かりました。

今後研究部会としては、継続して検討を進め、2019 年度のしかるべき段階で新たな UD テーマでの活動を拡大し、合わせて新たなメンバーの募集を進め、より広い対象領域を横断的に UD の適用を進めて行く予定です。



## 質の高い UD 社会の実現を目指して

### 「第 7 回国際 UD 会議 2019 in バンコク」開催のご案内

IAUD は「第 7 回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2019 in バンコク」を 2019 年 3 月 4 日(月)から 6 日(水)の 3 日間、タイの首都バンコクで開催します。

会議のテーマは「UD による持続可能な発展」。ASEAN 各国の産業振興と地域発展、そして日本との更なる経済的文化的交流を促進することを通じて、質の高い UD 社会の実現をめざします。

現在、国際会議でビジネスにおける UD の取り組みを講演いただく企業や団体を募集しております。

また、国際会議で発表していただく UD に関する研究・開発、実践活動の論文も 11 月 20 日(火)まで募集中です。

どうぞ奮ってご応募ください。

※「第 7 回国際 UD 会議 2019 in バンコク」公式サイトはこちらをご覧ください。

<https://www.ud2019.net>

※「第 7 回国際 UD 会議 2019 in バンコク」講演者募集はこちらをご覧ください。

<https://www.ud2019.net/news/index181010>

※「第 7 回国際 UD 会議 2019 in バンコク」論文募集はこちらをご覧ください。

<https://www.ud2019.net/papers>



会場となるモンクット王工科大学



## 2018年11月の予定

月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15 13:00～ 衣のUDPJ @IAUD サロン	16	17	18
19	20 「第7回国際UD会議 2019 in バンコク」論文募集締切	21	22 16:00～ 余暇のUDPJ @IAUD サロン	23 勤労感謝の日	24	25
26	27	28	29 13:00～ 標準化研究 WG @IAUD サロン	30		

次号は12月上旬発行予定

特集:住空間PJ IAUD 住宅コンペ結果発表／「IAUD アワード2017」受賞紹介⑥ほか

IAUD 情報交流センター(IAUD サロン):

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階

電話:03-5541-5846 FAX:03-5541-5847 e-mail:info@iaud.net